二次元ドリームノベルズ／PDF立ち読み版

カグヤ
女侍斬魔録

小説 新居　佑
挿絵 ろばー

第一章　鎧袖一触　006
第二章　会稽之恥　041
第三章　拈華微笑　082
第四章　阿諛追従　125
第五章　荒淫無恥　181
第六章　乱臣賊子　229

登場人物紹介

Characters

カグヤ

妖魔退治に優れた武家出身の天才剣士。城下内にある剣術道場の師範をしている。

サイネ

代々カグヤの家に仕えている忍び一族の末裔。カグヤの側近として仕えている。

佐久間

城下の武士たちを取りまとめる重要職の役人。

ナギ

カグヤが留守の間、重臣として城の臣下に組み入られた謎の女。

『第二章　会稽之恥』より

「くらいなさいっ！　秘剣、桜花閃斬っ！」
バシュゥゥゥッッッ！
月光に反射する白刃が夜の漆黒を切り裂いた。音より速い太刀筋は美しい光の軌跡を描き、膨れ上がった光線が淫蟲たちを飲み込んでいく。限界まで高めた気の閃光が、闇夜を切り裂き、そして妖魔を断つ。
――。
刃が音もなく鞘へと回帰した。直後、緑色の血が辺りにバシャっと散る。わずか瞬き数回の間に、淫蟲たちは数えられるほどにまで激減した。
「くっ、まさか……まだそんな力が残っていたなんて……っ⁉」
驚愕の表情を浮かべるナギに向かって、少女侍は白刃を向けた。
「あなたの敗因は、他者の命を軽んじたことっ。冥府で皆に詫びなさいっっ！」
カグヤの腰から放たれた閃光が、ナギの首筋目掛けて一直線に伸びる。避けることはおろか防ぐことも叶わない。カグヤは勝利を確信した。
瞬間、笛の音の旋律が変わった。斬りかかろうとしていたカグヤの動きが、いきなり鈍くなった。
「なに……っ⁉　くっ、妖魔の血が……くっ、そ……っ」
舌打ちした。見れば、先ほど衣服に染みついた淫蟲の返り血がネバネバとしたものに変わっている。それらは接着に使用する樹液のように地面にべったりと張りついて、少女剣

士の動きを鈍化させていた。
（この……気色が悪くて……身体が動かないっ）
ネットリと糸を引くくらいにまで粘ついた濃い緑の返り血に全身を包まれて、カグヤの自由はほぼ奪われてしまっていた。両足を地面にへばりつかせ、刀を振り回すどころか腕を上げることすら困難になっている。気づいたときには、袴の内側、細い足首から引き締まった太腿に向けて、数匹の蟲たちがジュルリジュルリと這い上がってきていた。
「い……やぁ……。離れろ、この……くぅぅっ」
両足に発生した得体の知れない感触を、なんとかしようと懸命に蟲たちを取り除こうとするが、吸盤と細かい牙でピッチリ肌に食いついた蟲たちは、そんな妨害行為などものともせずに、上へ上へと昇っていく。
鍛えられた筋肉の上に少女らしいぷにんとした脂肪が乗った太腿を越え、女の部分を覆う白い股布にまで到達する。身体をくねらせ、小ぶりな桃尻の輪郭を丁寧に捉えていく。
チュル……グチュゥ……。
「ひっ、いぃ……っ。や、お尻になんて……な、ぁぁあっ⁉　入ってく……お尻の穴……蟲がわたしのお尻に……そん、ふぁぁ……やぁぁ……」
思わず自らの指で肛門をかき回して、中の蟲たちを取り除きたい欲望に駆られた。けれど侍としての自尊心がそれを拒む。最大の敵を目の前にして、そんな破廉恥なことができるはずがない。

（う……お尻で動いて、る……。気持ちが悪い……でも、ここで負けるわけには……っ）
淫蟲がウジュウジュと尻穴を抉り込むたびに、背筋がピクピクと跳ねた。排泄物がゆっくりと逆流してくるような不快極まりない感覚に、胸の奥が気持ち悪くなる。
「どうしたのかしら、カグヤちゃん？　苦しそうねぇ。少し待っててあげましょうか？」
「くっ、あ……誰が……っ。この程度で勝ったと思わない……でぇっ」
額に汗を浮かべながらも、黒髪の女侍は何事もなかったように刀を構えて駆けた。
「いく……ぞっ！　えやぁぁっっっ！」
気合を込めた一撃にはまるでキレがない。女妖魔の刀に簡単に受け止められてしまう。
「ひ、ひぃぃっっ！」
突然カグヤの腰が跳ね上がった。お尻を中心に腰をくねくねと、まるで何かから逃れるような動きを見せる。
（噛まれ、たぁ……!?　あ、ああ……お尻、おかしく。これくら……ぃあぅぅっ）
思わずかわいらしい声を漏らした。肛門の奥へと潜り込んだ淫蟲が大きく口を開けて、腸壁を甘噛みしてきたのだ。肉の内側から送られる刺激が、少女の意思とは無関係にピリピリとした心地よい電流を発生させる。
早く出したいはずなのに、どういうわけか頭は痺れて、肛門がキュッと締めつけられる。突き出すような円運動を繰り返す腰の動きが、より一層大きくなっていく。
「なぁに、そのいやらしい腰つきは。天才剣士がはしたないにもほどがあるわね」

わざと力を抜いてこちらを弄んでいる女に言い返してやりたくて口を開くと、反対に「はぁ……あぁ……」という自分でも思いがけない甘い声が漏れ出した。いつの間にか息が荒くなり、頬が朱色に染まっている。顎に力が入らずに、唇がだらしなく半開きになってしまう。目の前の敵に集中しなければならないのに、視界がぼぉ～っとしてきて、握った掌が自分のものでないかのような感覚に陥る。

（おかしい……こん、んぁ……感覚……ナギの妖術⁉　でも、あぅっ！　はぁ、噛まれるたびにお尻が跳ねて……なんで熱い、のぉ）

火照ってきているのは顔ばかりではなかった。妖魔に蹂躙され続けているお尻までが、甘い熱を帯びてきている。淫蟲の甘噛みはおぞましい見た目とは裏腹に、まるで愛おしい口づけのように感じられた。お尻の肉が内側から揉み込まれながら、ゆっくりと広がっていくのがわかる。味わったことのない甘ったるい感覚が、女侍の下半身を灼いた。

（だめ……。このままじゃ……負け、ちゃう……っ）

女侍の表情が焦りと困惑に彩られる。お尻で発生した正体不明の感覚に、頭がどう対処してよいのかわからない。ビクビクと跳ね上がるような動きまで見せ始めた自分の腰に、理性が必死の停止信号を送る。けれど初めての感覚への対応方法を熟知していたのは身体の方だった。

お尻だけではなく、下半身全体が煮立ったお湯のように泡立っている。ジンジンとした痺れが足腰から力を奪い、踏ん張るどころか立っているのさえ辛い。腰がだんだん前屈み

になっていく。丸まった上半身と折れた膝のせいで、真剣勝負の最中だというのに、完全な及び腰になっている。構えた刀を杖代わりに地面に刺していないと、今にも跪いてしまいそうだった。

（ふぁうっ、しっかり、しな……さい。でも、痺れて……あぅぅ）

剣士にあるまじき醜態を晒している自分を叱咤する。しかし身体がふわふわして空に浮き上がっていくみたいな状態では、いくら強固な意志を持ってもどうすることもできない。

「足がガタガタいってるわよ。腰もそんなにくねらせて。淫蟲にお尻を弄られるのが、そんなに気持ちいいのかしら？」

屈辱的な台詞と同時に色っぽい口紅を乗せた唇が眼前に迫る。精気を吸われる、と思ったが唇の向かった先は首ではなかった。

「んん⁉　ふわぁ……んく、ふぁにを……ふくぅ……らめ、れぇ……っ」

身体の芯に電流が走ったみたいに、全身がピクンと爆ぜた。ナギの舌を通して彼女の温もりがそのまま自分に流れ込んでくるみたいだった。

息が苦しくなって、たまらず意識的に呼吸をしようとする。するとわずかな隙を見逃さなかった妖魔の舌が、少女のかわいらしい舌に絡みついてきた。女のヌルリとした唾液の感触が、口内と喉奥を満たしていく。

（ん、はぁ……なんれ、はぐぅ、気持ちが……）

無用心な敵の舌を噛み切ってやればいいと頭では思う。けれど相手の舌が器用に自分の

舌に絡みつき、お互いの温もりがひとつになると、そんな考えは桃色の靄の中に消え去ってしまった。
「うくぅ、はむん……じゅるちゅぅ……あ、はぁ、んん……ちゅぐぅ」
（だ、めぇ……こんな、身体が痺れて……頭、おかしく、なってしま……）
口内いっぱいに広がったナギの唾液に、自分の涎も混じっていくのがわかる。緩急自在の舌先の動きに、いつしか自分から絡みついてしまっていた。熱い刺激が雷のように全身を駆け抜けて、今にも刀を手放してしまいそうになる。
鼻の呼吸が荒くなってきて、呼吸困難でもうこのまま死んでしまうのではないかと思えた瞬間、ナギの唇がようやく離れた。
「あ……はぁぁ、ふぁ……ぁ」
いきなり漏れ出た甘い吐息に、思わず顔が赤らんでしまう。戦闘中にうっとりしていたなど、侍にとって恥以外のなにものでもない。
「どう、よかった？　ほらわかる？　カグヤちゃんの目がトロンとしてるわ。それってつまり、あなたが剣士なんかじゃなく、立派な牝だっていう証拠よね」
牝……なぜそう呼ばれたのか、詳しい意味はわからなかった。剣術の修練に青春はおろか女であることすらも捧げた少女にとって、性に関しては必要最小限の知識があるだけだ。
「なにを無礼な。武士であるわたしが、そんな……」
「ふふ、初心なのね。でもあなたの身体はすごく欲しがってるみたい。いいわ、そろそろ

カグヤちゃんも経験した方がいい頃ね」
「経験……ですって？」
「そうよぉ。女の最大の幸せ。一度覚えたら、抜け出すことのできない底なしの快楽。カグヤちゃんだってそれは同じ。いくら鍛えたって我慢なんてできないわよ」
ナギが指を翳すと、直腸に詰まった淫蟲がブチブチと一斉に潰れ出し、カグヤの排泄器官全体に妖魔の体液が染み込んでいく。少しの間だけ液体でお尻を清掃されているかのような不思議な感覚に陥る。しかしそれが過ぎると襲ってきたのは、今までとは比べものにならない圧倒的な淫電流だった。
「あ、っあ！　ひぃぃぃっっ」
甲高い悲鳴を発しながら。頤がキュンッと一気に仰け反る。お尻から頭のてっぺんにまで、甘く鋭い閃光が駆け抜ける。思わず腰が卑猥にうねり、少女の凹凸を前後に見せつけるように突き出してしまった。
（か、あはぁぅっ……なに、今の……頭が真っ白になっ……くひぃぃぃっっ！）
衝撃から覚めきっていない状態で、甘美な電流がお尻でもう一度炸裂する。腸液と蟲の体液でヌラヌラになっている尻肉に再び侵入し見境のない甘噛みを再開した淫蟲が、困惑する女剣士の白い肌をネットリと汗まみれにしていく。
それまで甘ったるい感覚が支配していたお尻に、いきなり熱棒を突き込まれたような衝撃が走った。直腸がヒリヒリと灼ける。敵は目の前だというのに、反射的にお尻が後ろへ

と突き出される。肛門の震えにたまらず括約筋を締めると、太腿のブルブルとした痙攣が止まらなくなってしまった。
「う〜ん、これだけ動いて、しかも潰れたから媚毒まで出してるのに。まだお尻だけじゃ無理みたいねぇ――」
なにが『無理』なのか、そんなことを考える余裕すらなかった。ひっきりなしに訪れる桃色の電流に思考回路はズタズタにされている。今はただ子犬のように無条件にハッハッと舌を出し続け、お尻をビクビク跳ね回らせることしかできない。
「――まぁ、どうせそのつもりだったし、いいかしらね……カグヤちゃんのためにも」
身体全体が痺れて思うように動かない少女剣士を、新たな淫蟲が襲う。
「ひ……くぅ、こいつら、また……。え、な⁉　ちが……今度はそっち……なんてっ」
蟲たちの狙いがまた肛門だと思っていた少女の意表をついて、妖魔たちが向かったのは股間のちょうど真ん中の部分。股布に隠された女として最も恥ずかしい場所、秘芯だった。
性的なことに疎いカグヤだが、詳細までは知らないにしても、ここが生涯愛する人に捧げて子供を授かる場所であることは知っていた。女に生まれた以上、絶対に守り抜かなければいけない場所、そう教えられてきた。
「やめ……くっ、そこは……こないでっ！　だめぇぇっっ！」
節操の危機に直面して必死に蟲を排除しようとするカグヤだったが、一度袴の中に潜り込んだ妖魔を取り除くのは難しい。キュッと内股を締めて無駄な時間稼ぎをする。恥ずか

しさと恐怖で心臓がバクバクいっている。
「い、や……いやぁぁっっ！　入ってくるなっ！　このぉぉぉっっ！」
思わず叫んでしまった。ハッと我に返って口をつぐむ。しかし――。
カグヤは左手を袴の中に突っ込むと、足首から太腿にかけてズリズリと登ってくる蟲たちを払いのけようとした。股間部を弄りながら、刀だけは放さないカグヤをナギが笑う。逃げ出したいほど屈辱だったが、今はそんなことにこだわっている場合ではなかった。
「あぐっ、こいつら……しつこ、いぃっ。くるな、もうやめてぇぇっっ！」
股間にジュルジュルとした妖魔の感触が充満していた。嫌でたまらないネバネバとした感覚は、まだお尻なら我慢できた。けれど乙女の最も大切な秘部では蟲の嫌悪感は倍増する。平静を捨て大声で叫びながら、最後は両足をジタバタさせた。だが結局は時間の問題だった。隙をついた一匹の淫蟲がかわいらしい花びらに触れる。
「ほ～ら、カグヤちゃん。かわいい妖魔があなたのアソコに入っていくわよ」
『アソコ』。明確に言葉にされてしまうと、理性がより意識してしまう。ズルズルというたまらない感覚が股間を震わせ、ゾワゾワした鳥肌が全身を駆け抜ける。まるで袴が透明になってしまって、侵入する妖蟲の動きをじっと視認しているかのように思えるほど感覚が鋭敏になっていた。
（あぁ、入る……入って……）
腰がビクンっと震えた。わずかに生え揃う薄い恥毛を一本ずつ擦り倒して、ナメクジ状

の蟲たちが女の割れ目に到達した。蟲たちは割れ目の入り口でも探すように、身体をくねらしながら薄く張った処女膜を弄る。

ジュル、ジュルル……っ。

肉の花びらが蹂躙され、自分でも知らない未知の花園の扉が開く。瞬間、カグヤは生まれて初めて自分の女というものを感じた。

「ひ、ひぐぅぅぅっっっ！」

全身を一瞬で焦がす魔悦の雷に、少女の小さな身体が打ち震えた。それまでまったく意識したことのなかった部位である股間が、身体の中心でありすべてなのだと強制的に実感させられる。

「なにを、し……たの……⁉　わたし、こんなの……初めて……な、ん……」

さっきからずっと疑問に思っていた。なぜお尻で気持ちよくなるのだろう。ましてや先ほど蟲が侵入したばかりの陰唇は、赤ちゃんを育むためのものだ。こんな足の先から脳の皺（しわ）にいたるまで、瞬時に光が走る気持ちよさが、人間に生来からあっていいはずはない。しかも自分は精神と肉体を鍛えた侍だ。戦闘中に翻弄されるほどの心地よさを感じるわけがなかった。はずなのに、

「ふ、ふぁぁっっ！　あぐぅ、ひはぁぁぅっ！」

身体に力がまったく入らない。お尻と同様に処女膜の内側でも始まった淫蟲たちの甘噛みが、女剣士の腰を蕩けさせる。蟲たちが膣道をウネウネと這い上がり、女全体を白い光

が包み込む。
「気持ちがいいでしょう？　もう蕩けてしまいそうなくらいに。それが女の快楽よ。いくら澄ましても、気を張っていてもダメ。アソコを弄られると、そんな自分なんて消えてしまうのよ、ふふ」
カグヤはいやいやをするように首を横に振り続けた。そうしていないと、ナギの言う通り剣士としての自分が消えてなくなるような恐怖に駆られた。現実的に自制心はなんの役にも立っていない。発情した牝犬のように腰を後ろに跳ね上げられる。蟲の侵入を阻むようにピッチリと閉じていた両脚が、今では子供がくぐれるくらいにまで浅ましく開脚している。背中を猫のようにキュンと反り、杖代わりの刀に両手で掴まっている。
長い距離を走りきったときのように息は切れ、肩は上下に大きく揺れる。頬が真っ赤に紅潮し、脳髄が甘い閃光で灼かれるたびに悔しそうに震える歯を食いしばった。
「ふぅ……く、んん～、はふぁっ……むふぅぅっっ」
情けない声を漏らすまいとして、代わりに鼻息が荒くなる。熱病にかかったように視界がぼやけ、時間の感覚すらもなくなっていった。きれいに括られた黒髪が肩から背中を撫でることすら気持ちよく感じられ、小ぶりなはずの乳房が心なしか、張りを帯びてきているようだった。
「我慢できないって言ってるのに……ほらぁ、ここはこんなに求めてるわよ」
倒れないようにするだけで精一杯のカグヤの横に移動したナギが、おもむろに手を伸ば

してきた。衣に隠れた赤いふたつの乳豆をキュッと捻り上げる。
「っっか、ぁぁっっ！　ひ、ぎっ、そこ……だめぇっ。くぁぁっっ」
緩やかに脱げ落ちる衣の奥から、小柄な少女らしいほっそりとした撫で肩が見えた。浮き上がった鎖骨のラインの下にきつく巻かれたサラシまでが取り払われる。お風呂に入るとき以外は決して人目につくことがない女のシンボルは、きれいなお椀の形をしており、その先端は恥じらいと情熱の赤で彩られていた。
「あら、ごめんなさい。でもカグヤちゃん。聞いてもいいかしら？　おっぱい摘まれて痛い？　それとも気持ちいい？」
「き、気持ち……いいわけ……なぁ、い……放せ、胸を弄る、なぁぁっっ！」
嘘だ。カグヤは叫びながら思った。コリコリになった乳首を指の腹で扱かれると、胸が蕩け落ちてしまうのではないかとさえ思えた。胸なんて呼べるほど立派なものとも思ったことがなかったのに、今は違う。平たいお椀をふたつ横に並べたようなおっぱいが、ナギの手によって優しく、ときには強引に揺らされて揉まれる。中に詰まった脂肪がぐらつき、燃えるように乳首が熱い。
やめてほしくない。自分は女の子なのだと思える瞬間が、なぜだか妙に心地よかった。けれど同時に怖さが湧いた。剣士としての誇りを失う怖さ、そしてこの得体の知れない快楽に溺れてしまった先にはある不安があった。それを見透かしたように、女が言った。
「そう、初めてだから怖いのね。そうね。これ以上焦らすのも、カグヤちゃんにはかわい

そうよね。いいわ、じゃあ……」

ナギは含み笑いをすると、カグヤを背中から抱きかかえた。がっしりとした力で少女侍を押さえつけると、仰向けの後頭部がナギの胸の谷間に収まる位置に止まる。両手が少女の太腿を固定し、寝そべったままの状態で腰だけ持ち上がったような姿勢になる。

その間、何も抵抗できなかった。しなかった。膣内とお尻で蠢く妖魔たちがもたらす激感で身体はひっきりなしに震えていた。弄られたばかりの乳首は、夜風に触れるだけでシビシビと気持ちよかった。

頭では恥ずかしい、抵抗しなければと思っている。それなのに高鳴り続ける胸の鼓動と股間から湧き上がってきた桃色の感情とが、少女剣士の好奇心を刺激した。

もっと先を知りたい。もっと気持ちよくなりたいという劣情を否定できない自分の甘さを悔いてみても、返ってくるのは全身を痺れさせる快楽電流ばかり。

後になって思う。どうしてあのとき自分は拒まなかったのだろう。こんな感覚など一生知らなければよかったのに。けれどもう戻ることは叶わない。選んだ自身の欲望とそれを抑制する経験と知識を持たない天才剣士は、快楽の沼地へと一歩足を踏み出してしまった。

はらりと袴が脱げ落ちる。現れたのは鍛え上げられた筋肉によってキュッと引き締まりつつも、年齢相応の柔らかい脂肪分を含んだ可憐な脚線美だ。そして両脚の付け根部分、魅惑の三角地帯にひっそりと佇む秘密の花園。性格通りの真っ白い股布に隠された、それまで他人はおろか自分の目ですら、よくよく見たことのない少女の下半身が露になる。

『第四章　阿諛追従』より

初めて目の当たりにする肉貝に挿入された男根は、想像した以上に淫靡な雰囲気を醸し出していた。絶対的な征服者のように圧倒的な存在感を示す男根を、妖艶に包み込む桃色に充血した花弁。はっきりと目に映る淫猥な光景に、穢れたことをしているという背徳心が少女剣士を傷つけた。

しかし同時に、背筋を貫くようなゾクゾクした感覚が生まれた。大義を盾に、武家である自分が人前でこのようなはしたない姿を晒していることに対して、胸の奥から湧き上がってくる奇妙な快感が、酷く淫靡な想像を巡らせてしまう。

「う、動き……ます。よろしいですね」

腰をスッと上に持ち上げる。瞬間、自分の瞳に映る美しくも妖艶な光景が、濃い現実となって重みを増す。肉と淫蜜が奏でるグチャグチャという音がやけに生々しく感じられ、視線と重なる赤々と勃起した乳首が疼く。

（大丈夫、興奮なんてしていないわ……繋がっているのが見えてたって、これは才音を助ける演技なんだから……っ）

女唇に肉棒を突き込んでいる以上、感じてしまうのは仕方ない。しかし、それはあくまで生理現象の範疇としてだ。強い意志をもってすれば、理性を失い快楽に溺れてしまうことなどありえない。この淫靡な行動もすべては今晩限りのまやかしだ。カグヤは自信を持って、滾る肉棒を腰で扱き立てた。

ズチュッッ！　ズボズボッッ！　グチュゥゥッッ！

仰向けになった状態で上半身だけ起こしているため、真っ赤に充血した肉花弁が、ペニスの出し入れに呼応して捲れ返る様子が丸見えだ。感覚としてだけでなく目に見える淫靡な光景は、跨って性行動の主導権を握っている少女くノ一を強烈な背徳心で包み込む。

「んいいいっっ⁉　あおぉおっっっぅぅっっ！」

少女を悩ませるのは心の問題だけではない。腰をシュゴシュゴッと上下に動かす。肉棒が信じられない速度と力で蜜壺を穿つ。たったそれだけで切れ長の目が大きく見開かれ、全身に雷のような閃光が迸った。決壊した川の流れのように荒れ狂った膣道から溢れた淫水が、牡棒との結合部分からブシャァァッッッと湯気を伴って噴出される。

（な、にぃ……これ、深くて……いつもより熱い……身体が火の玉みたい……なんで、他のこと考えられな……いぃっ⁉）

ドッと湧き出してきた大量の汗と痺れるような痙攣で、自分が軽く絶頂したのだと知る。蒸れてベトつく白濁の忍び装束の密着度が更に増し、火照って張りの出てきた少女の可憐なボディラインが露になる。網目模様のインナーは更に密着度を増し、締めつけられた柔肉がプニュリと溢れ出てきた。

下半身に目をやれば、そこはすでに言い訳のしようがないほどグチャグチャに蕩けきっていた。足の付け根に縒れた股布は、水を絞らなかった雑巾のようにベチョベチョだ。次なる挿入を求めてウズウズと蠢く妖花からは、透明でネトついた愛蜜がとめどなく溢れ、少女くノ一の太腿を伝って足首にまで到達している。

自らの愛蜜で牝臭くなった男の体臭が、信じられないくらいに鼻に突く。鼻腔だけでなく、毛穴という毛穴から男女の淫靡な香りが染み込んでくる。
「はぁ……ふぅ、んぁ……」
「おいおい、呆けてる時間はないぞ。ちゃんと指を動すのだっ」
イったばかりの女がどれだけ辛く、そして気持ちイイか知りもしないで、男たちは休まないように命令する。
「ふぁ、ふあぁい……す、すいまへんれひふぁ……はふっ、んぁぁっ！」
(ど、どうしてしまったの……？　なん……れぇっ!?)
口から出た言葉自体に問題はない。むしろそういった屈服の台詞こそが才音を助ける近道だ。しかし、今までと決定的に違うのは結果ではなく過程の方だ。
嫌々に仕方なく服従しているという意識が浮かんでこなかった。頭で嫌だと思うことが、身体ではとてつもなく気持ちイイことだ。抗って自らの潔癖さを証明するどころか、むしろ男たちに媚びへつらい従順にすることで、侍としての縛めから解放されるかのようだ。
(気持ちがイイ!?　いやぁ、こんなのありえないっ！　こんな……自分から快楽を……求めるなんて……ぇっ)
ヌルッとした感覚が足の指先を浸食していく。男に跨っているカグヤは大股開きの両脚、その五本ずつの指を使って更に二本の男根を愛撫していた。痙攣する以外、何もすることがなくなっていた足先に余っていた男根が触れた途端、まるでそれが当たり前のように指

先が肉棒に絡まっていった。
「おほ、こいつ足でもしてくれるのか⁉　ふはは、結構なことだ」
元々器用だった上に剣士としての修練を積んだ身だ。身体のいたるところを別々に、しかも自由に動かすことなど簡単だった。親指の腹で鈴口から雁首にかけて擦り上げる。指先を開いて充血した剥き出しの男根を挟み込むと、シュシュッと素早く繊細に扱き立てる。
「ふ、ふぁい……淫らなくノ一の身体は、もう熱くて熱くて堪りまふぇん。うふふ、足指でも扱かせていただきまふ……ふぁぁんっ、ヌルヌルして気持ひイイれふぅぅっっ！」
男根の先走り汁と流れ落ちた愛蜜を混ぜた特製媚液を、粘膜代わりの指の腹に塗り込んでいく。舌でするように柔らかく、膣に挿れるように情熱的に。カグヤにとって足指は、すでに新しい性感帯になっていた。
「あおぅぅっっ⁉　んぐぅぅっっ、んんんっっっ！」
と、愛撫されている男たちの気持ちよさそうな顔を見て、我慢できなくなったのだろうか。淫乱くノ一の肉奉仕にあぶれた臣下たちが、穴や指がダメなら、肉質のよい柔肌だとばかりに一斉に勃起ペニスをカグヤの火照った身体に擦りつけてきた。
（なっ、なんだっていうの⁉　きゃ、肌だけでなくて服の上からなんて……んぁぁっ、そんなトコに擦りつけないで……あはぁぁっっ）
少女くノ一の視界が滾りきった肉棒で埋めつくされた。まるでペニスの養殖槽に投げ込まれたかのようだ。全身に透明で粘り気満点の先走り汁が付着し覆いつくしていく。

ヌメついていく衣服の上から、シュゴシュゴと勃起ペニスが押しつけられる。ジワリと染み込んでくる男汁と牝の汗を吸った忍び装束がテカテカとヌメ光り、少女侍の肉体が淫らな体液にまみれている。
「うほぉっ、気持ちイイのぅ、この太腿っ！　肉が柔らかいわ……弾力も抜群じゃ」
「馬鹿ものめ、やっぱり頬っぺたよ。どうだ、この売女め。きれいなお顔がくっさい精液で汚れているぞ、ぐふふ」
ありとあらゆる場所が肉棒に突かれ、這い回られ、汚された。肌が直接露出した部分は臍でも耳でもうなじでも、とにかくすべてが牡の匂いでマーキングされている。獣の本能だけで見るならば、カグヤはすでに立派な肉便器以外のなにものでもなくなっている。
（あぁぁ……イイ匂い。ダメだわ……男の匂いで頭が変になって……気が狂いそうよ……）
辺りは濃い牡の匂いで充満し、鼻で息をするだけでムワッとした発情臭が女の快楽神経を活性化させる。
「んぐちゅぅぅっっ……あはっっ、じゅるるっっ……ふほぉぉっっっ！」
男とまぐわうこと以外思い浮かべられなくなった。今までは才音を救うために、決して堕ちないために、動きながらでもなるべく自分のやっていることを考えないようにしてきた。〝感じてはダメだ〟〝これは演技だ〟と武士の誇りを守るためだけを考えてきた。
「イイッ……あおぅっ、オチンチンで擦られるの気持ひイイれふぅっ！　ヌメヌメしたのが……わらひを汚ひて……くっさいのが染みついてますぅぅっっ！　ああ、もっと強くし

てあげまふね？　んおぉぉっ、気持ちイイれふか？　皆様、最高れふかぁ？」
だというのに、腰が、口が、十本の指すべてが……まるで自分が妖魔にでもなったかのような錯覚を受ける。牡の精液を求めて、恥を捨て淫らに振る舞う女妖魔だ。
「手も口も、足すらも空いていないようだが……ならばこちらの穴を使わせてもらうか」
「ふぇ……っ⁉　んく、ほっひは、ひが……っ」
背を反らして腰を振る少女に辛抱たまらなくなったのだろう。別の男が無理やり少女の下に潜り込んで、お尻の穴を弄り始めた。
「ん？　なんだ、淫乱のくせに尻の穴はだめだというのか⁉」
肉棒こそ突き込まれた経験はなかったが、肛門を通った腸の中にも淫蟲は入り込んでいる。おそらく前と同様、いや今まで放っておかれた分、蓄積された牝の疼きはまるで想像がつかない。
（だめ、今は……今だけは……っ。くぅ、で、でも……ぉっ）
仲間を救い出すために、理性だけは失うわけにはいかない。ここは断固として拒否すべきだ。そのはずだった。
「い……いえ。どうか、お好きになさってください……あぁ、わ、わたしの淫らなお尻にもみなさんのチンポを……ぶち込んでやってくださいぃぃっっ！」
理性を無視して滑り出た卑猥な言葉に、背筋がゾクリとする。才音を助けなければという思い以上に、ネットリとした尻汁をジワジワ染み出させているお尻の穴に何かを挿れて

ほしいという思いが勝った。
「そうかそうか。よい心がけだ」
肉棒の硬くて熱い感触が菊門に触れた。コチコチに固まった男根は二度三度軽く尻汁を舐め取ると、躊躇なく一気に腸道を侵略した。
ズボゴォォォッッッ！
「あひぃぃぃっっっ！　ふ、ふか……ぃぃぃっっっ！」
肉の蕾がメリメリと押し開かれて、めくれた肉壁が露になる。本来は排泄物が出るところを無理やり押し広げられているのに、まったく痛みを感じなかった。それどころか擦られて和らいだ痒みが信じられないような悦楽となって、尻全体を極上の性感帯へと変化させる。
「こいつ、後ろに挿れただけで感じるのか。まさに変態だな。くく、ますます気に入った。どうだ女？　尻の感触は⁉」
問われて、カグヤは口の中の肉棒を吐き出してまで答えた。そうしないと気が狂ってしまいそうだった。網目模様の緊縛服がブルルンッとわなないた。
「あ、イ、イイですっ！　お、お尻の穴ぁぁっっっ、ゴリゴリほじれて……あぐぅ、痒いのがイイの。もう狂っちゃいそう……っ！」
最早口から漏れ出る言葉に嘘偽りはなかった。無理やり犯されているという屈辱の感覚は、前の穴では味わえないものだ。自然とすぼむ肛門の肉壁を男根が抉るように進む。

「ふふふ、このドすけべが。お前はお尻などという上品な物言いが許される存在ではない。快楽に溺れた牝豚だっ！　言え。お前のケツマ〇コはどんな感じだ⁉」

すでに侍を捨てた連中の指示に従うなど屈辱以外のなにものでもない。蕩けかけた誇りが堕落の言葉に反応する。しかし立ち直ることを許さない快楽は、気高い魂を納得させる強力な免罪符を差し出した。

（才音が、才音のためなら……っ。そう、だ……全部才音のためっ。わたしは悪くなんか……むしろ武士として賞賛されるべき……っ）

歪んだ正義が、少女の口から淫猥極まりない下劣な言葉を紡ぎ出す。

「は、はいっ……ケ、ケツ……んぁ、ケツマ〇コがイイですっっ！　わたし……いいえ、牝豚のケツマ〇コ蕩けちゃいそうですっ！　もっと突いてっ！　もっと前も後ろも……あぁっ、口の中もぉぉっっ！　全部……色情魔の牝豚を犯し抜いちゃってくださいぃっっ！」

侍の魂が壊れる音がカグヤには聞こえなかった。これは仕方のないことだ。仲間を助けるために身体を差し出す……屈服するわけではない。心は穢れのないまま、身体だけ溺れるのだ。吐き出される卑猥極まりない言葉も、快楽を欲する肉体反応の結果でしかない。時がくれば、ピタリと元の自分に戻れるはずだ。

「ははは、よくそんな汚い言葉が言えたものだ。お望み通りすべての穴を犯し抜いてやろう。皆、用意はいいな？」

少女の股間に剛直を突き込んでいる佐久間が音頭を取ると、周りの臣下たちが頷いた。

情欲を滾らせた瞳と肉棒が忍び装束の少女に迫る。
まずは前と後ろの肉穴が同時に蠢いた。前後の二人がわざと呼吸を合わせて、まったく同じタイミングでふたつの女芯を擦り上げる。
ズクンッッ！　ズブブチュゥゥッッ！
肉壁一枚を隔てて、二本の剛直から発せられる快感は一本のときの比ではなかった。限界まで押し広げられた肉穴が、歓喜の電気信号を全身に送り込む。
「ふほぉぉぉっっ！　イイィィッッ！　あぐっ、気持ちイイで、すぅっ！　おはぁっっ！」
（あ……す、すごいっ！　ふたつの穴突かれてぇぇっっ！　こんなの初めてぇぇっっ！）
計り知れない快楽の奔流が、仲間を救出するという使命感を飲み込んでいく。目の前に差し出されたまま忘れていた勃起肉棒たちを、むしゃぶりつくように飲み込んだ。
「んじゅぶぅぅっっっ！　んちゅぐちゅぁっ……おぉぉぅっ、オチンチン、オチンチンんんっっっ！」
（あぁぁぅ、わたしは自分でしゃぶって……あまつさえ感じてる。悦んでる……才音、許して……わたし、気持ちがイイ、の……よすぎるのぉっ！）
肉棒に対する恐怖や嫌悪感などとっくに消えうせていた。たまらなく愛しい肉の巨根をいつまでも頬張り続けていたいとさえ思う。片道を扱くだけで脳が痺れる。往復すると光が走る。もう抜け出せないかもしれない。もし今、肉棒を取り上げられたら、恥女のように求めてしまうかもしれない。

「おいひぃぃれふぅぅっっ！　わらひ……皆様にずぅぅっとご奉仕しますぅっっ！　あぅぅ、させてくださいぃぃっっ！　だから、だからもっと突いてっ！　んぉぉぅっ、じゅるぐぅぅっっ！　もっと狂わせてくだふぁひぃぃっっ！」

秘めた決意を浮かべていた勝気な表情は、悦楽に蕩けた牝豚のものに変わっている。必死になって肉棒を舐め回す唇からは唾液と先走り汁が零れ落ちる。下ろした黒髪はわさわさと宙を舞い、興奮した獣のように荒い鼻息が淫らな饗宴を盛り上げる。ありとあらゆる感覚を快楽へと染め抜こうと、脳内麻薬を吐き出し続ける牝の欲望が止まらない。

「おぉっ、イイぞ。素晴らしい娘じゃ。鍛え抜かれた精神力が淫らなことしか考えられぬようになるのを見るのは、ほんにおもしろいのぉ」

投げかけられる屈辱的な言葉すら、際限なく膨れ上がる黒い情欲は淫らな栄養にしてしまう。全身の肌がゾクゾクと身震いし出し、股間からは間欠泉のようにブシャブシャと蜜の飛沫が飛び散っていく。乳首の先に火でもつけられているようだ。責め立てられる陰部と焦らされ続ける乳頭が、螺旋のように渦を巻き、カグヤを淫獄の彼方へと導いていく。

（おぉぅっ、もう、もうらめぇっっ！　わ、わらひ……イキそう……っ。イクのが、我慢できらひぃぃぃっっっ！）

限界を迎えつつある少女の身体が、より激しい痙攣を見せる。それを感じ取った佐久間は、淫水をブシャブシャと吐き出し続ける股間に手を伸ばした。蠢く肉ビラの上で寂しそうに皮を剥いて赤くなっている勃起肉豆をギチィィッと思いきり捻り上げる。

『第六章　乱臣賊子』より

「くっ……んぁ、あぐ……は、放せっ！」
いきなり現れた触手で、才音は動きを封じられてしまう。
自分と少女の真ん中にナギはいた。いつもの桜色と橙で、熟れた脚線美を惜しげもなく剥き出しにした男を惑わす衣を着ている。人を見下す態度や喋り方も健在だ。
これまでの状況を嬉々として話す女妖魔に、怒りの感情が迸った。才音を彩るすべての感情が、炎の中に放り込まれたようだ。感情を超えた殺意が、立ちつくすくノ一を包み込む。
燃え盛る炎をひとつの大きな竜巻へと変化させるように、才音は触手に捕らわれた最愛の妹の姿を見据えた。
すべてを快楽に捧げることを誓ったカグヤは、今こうして自らが産んだ妖魔に母乳を分け与えていた。堕ちた気高き精神は、妖魔の母親になることすらも快楽に変えてイキ続ける。
「あら、まだお乳の時間なの？　たくさん出るのねぇ」
お産婆のようにしったかぶりな口調で派手な女が話す。いまや天才剣士の威光を見る影もなくしたドロドロの少女が、ニタァと淫らな笑みを浮かべて応える。
「あへぇぁ……ナギ様ぁ、そうですぅ……この仔たちすごくって、ひぎぉぉっっ！　出るのが追いつかな……あふっぁっ、それ以上吸っちゃ……ま、また、イ、イク、イッグゥゥゥゥゥッッッッ！」

母乳を我先に吸いつくそうと、まるで餌に群がる池の鯉のように、肉色の触手たちが迫ってくる。晒された少女の乳房は、心なしか体積を増しているようにも見える。お産後の女性特有のぽってりとした胸には、情熱的な接吻の後のように、赤い痣がいたるところに見受けられた。食欲旺盛な触手妖魔たちによって、肌ごと吸われたのだろう。

「あぁぁっっ！　イイッ！　うふふ、もっと吸ってっ！　ほら、遠慮しちゃダメよ。お母さん、感じるとおっぱい出ちゃう変態なんだから。あは、もっとイカせてぇえっっ！」

苦痛さえも快楽へと変換させる少女は、涎と嬉し涙を撒き散らしながら叫んだ。すでに顔を引き締める筋肉が痺れきっているのだろう。トロンと蕩け落ちた眉根や開けっ放しの唇。時として虚ろな、時として嬉しそうな表情の切れ長の目の奥で、いやらしい桃色の炎が灯っている。

「うふふ、気持ちよさそうね。でもカグヤちゃん。食べてばかりじゃ運動不足になっちゃうでしょ。そろそろこの仔たちの運動の時間よ。さぁ、あなたたち。お母さんをたぁっぷりいじめてあげなさい」

ナギの言葉の意味を解したのか、それまで飛び散る母乳を吸い取ることに没頭していた触手妖魔たちが一斉に速度を上げてウネウネと動き出した。

ドクドクドク……。

不気味に鼓動する妖魔たち。すると股間部に接する触手がいきなりグニャリと形を変え、現れた細い無数の触手群が少女の幼い股間部へと絡みついて振動を始めた。しかもただ上

下に揺れるだけでなく、まるで触手そのものが少女の感覚に連動しているかのように、グッショリと濡れた股布の形や動きに合わせて、微妙に触手の形状や締めつけ具合、更に振動までも変化させている。
「くぁぁぁっっ！　あぐぅっ、し、痺れるっ！　アソコに電気が走って……おふぅぅぅ、最っっ高ぅぉぉぉっっ！」
その陰惨な行為を望んでいたといわんばかりに、カグヤは嬌声を張り上げる。
噛まれたときとも、貫かれたときとも違う、まるで子宮全体を揺さぶられているような股間の響きに、甘い鳴き声を漏らす。力なく折れ曲がった足がビクビクと小気味よい痙攣を始め、身体中がメラメラと火照ってくる。
「アソコぉぉ？　カグヤちゃん、ダメでしょう。子供たちにはきちんとした言葉を教えなくちゃ。ほら、言ってみなさい」
「あぁぁ、ごめんらひゃい……ぃっ。いい、みんな？　ココはね、オマ〇コっていうのよ。そう、牝マ〇コ。女の人の中で一番ダメなところなの。わかった？　わかったら、もっといじめてぇ……お母さんの牝マ〇コ、むちゃくちゃにしてぇぇっっ！」
まるで若い母親を先輩の母親が教育しているようだった。従順な新人は、言われた通りに卑語を口に乗せる。まるで男を誘う遊女のように、少女の瞳が妖しく光る。
才音は血が滲むくらい唇を噛み締めた。その卑語をどこで覚えたのかなどはどうでもいい。そんな言葉を決して口にするはずのなかった少女の変貌に、またひとつ憎しみの炎が

点火する。
ヴヴ、ヴヴヴヴヴヴッッッ！
「おぉぉっっ、ふぐぁぁあっっっ！　イ、イイッッ！　牝マ〇コイイッッ！　おぐぅぅっ、イグッッ！　ま、たぁっっイックゥゥッッ！」
激しさを増す超振動に呂律が上手く回らない。喉が嬌声を漏らすだけの器官へと変わっていってしまうようだ。意思を離れて身体が勝手に跳ね動く。
「まぁ、いつの間にそんなこと覚えたの？　偉い仔たちね。他にはどんなのができるのかしら？」
自分の能力を誇らしげに自慢する子供のように、蛸のような触手たちは踊り狂う。現れたのはそそり立った肉棒触手だった。顔前に突き出された太い逸物に女剣士の顔が情欲の色を濃くする。
（ああぐぅっっ、こ……れ、牡のチンポ……オチンチン……ンン）
股間の快感に溺れる蕩けた瞳の前には、見事に形作られた擬似勃起が誇らしげに掲げられていた。
「んぐぅむむっっ⁉　はんぐ、むむふぅぅっっ！」
口内への挿入は突然だった。いきなり喉奥まで突き込んで、口の中いっぱいに強力な媚毒粘液を放出する。
「ふぐっ……ん、んん。ちゅぶ、ちゅちゅぅ……ぺちゃぺちゃ……れろれろ……」

（おいひぃぃっっ！　この仔たちのチンポがイイッ！　人間のなんて比べものにならないひぃぃっっ！）

頭で何も考えなくても勝手に舌が肉棒に絡みつく。まるで身体が男根を求めているかのように吸いついて離れない。溢れた涎が、口元から愛液のように飛び散った。

先走り汁の成分は、妖艶な熟女や初心な少女すら狂わせる魔媚薬だ。舌にわずかに触れるだけで、この世に存在するどんな珍味ですら及ばない至極の味が女の舌を蕩けさせる。

未だに奥底に眠っていた牝の本能が、焚きつけられた淫欲の炎によって強制的に目覚めさせられる。理性でどれだけ押し殺しても、一度目覚めた女の肉体は貪欲に快楽を貪りつくそうと、燃え盛る淫獄へと鍛え上げた肉体も気高い魂さえも投げ出した。

「はぁむぐっ。んぐ、あはむ……れろ、くちゅ……おほ、おぉぉちゅぐぅ」

胸がトクトクと高鳴っていく。あれほど嫌だった匂いや感触が、今はたまらなく愛おしく感じてしまう。徐々に硬度を増していく男根を舌の上で、まるで飴玉でも舐めるように転がす。

（ら、らめぇ……イクっ！　舌で舐めてるだけで、お腹が……、お腹がゴボッて爆発してるぅぅっっっ！）

まるで口が膣、尻、胸に続く第四のマ〇コになってしまったようだった。いや、実際そうなのだろう。ザラザラした舌の表面と、触手勃起に配置された小さいイボイボが擦れ合うと、膣内をズコズコと犯されている気になってしまう。熱でドロドロした愛蜜の代わり

に、肉棒に纏わりつく淫らな唾液がクチュクチュと淫らな音を立てる。
肉棒の先端が喉奥を突いて、雁首が唇からジュルッと抜け出るごとにカグヤはイった。そしてそのたびに仰け反る身体を、なんとか押しとどめて決して触手勃起を放さない。
「じゅるるるっっ、ヒグゥッッ！　おふぉぉっ、ふじゅぅぅっ……あむ、ちゅぐるるぅぅぅ……っ」
手が使えない代わりに、身体を思いきり前後させて根元から先端まで丁寧に肉棒を扱いていく。勃起から立ち上る匂いや密度と量を増してくる先走り媚薬が、清廉な味覚を淫らに狂わす。
「快楽への執念かしらね。うふふ、何かに真っ直ぐ没頭する精神力は、侍でなくなっても変わらないのねぇ」
ヴヴ、ヴヴヴッッッ！
火付け役である股下の振動触手が唸るように振動する。まるで暴れ馬にでも括りつけられているかのような上下の振動に、破れた衣服から溢れた肌がビンッと張り詰める。勃起した乳首が、裏地に擦れてヒリヒリとむず痒い。けれど数瞬後には、痺れるような甘さに変わっている。蟲たちによって何日も犯されてきた肉体は、打てば響く鐘の音のように敏感で、すべての感覚を牝の悦びのために捧げていた。
周りの触手たちが、剥き出しになった若い太腿を持ち上げた。開脚状態のまま高々と上げられた両足首が天井からも伸びる赤黒い触手でしっかりと固定される。腰をグンッと前

方に突き出した情けない格好のまま一気に、白い股布が振動を続ける触手に容赦なく押しつけられる。
「んぐぅっ⁉　はぐっ……んじゅぶっっ、ふごぉぉぉっっ！」
うっとりと肉棒を見つめ続けていたカグヤの瞳が、大きく見開かれた。それまで均等の力で股間全体に行き渡っていた振動が、より的確に女の弱点を責め立てる。ジュブジュブに濡れた純白の股布に潰れた鞍触手が半ばめり込んでおり、溢れ出した愛蜜が触手を伝ってトロトロと床に零れ落ちる。桃色に染まった肉ビラの入り口で発生した淫辱の波が、子宮の奥までブルブルと揺らす。
（お、お豆が潰れるっ！　直接振動が当たって……くひぃぃぃっっ、死ぬ……死んじゃうくらい気持ちイイっっ！）
まるでうねる食虫植物に肉体を捧げているようだった。妖魔たちは身をよじって暴れようとする泣き顔の少女を、数本がかりで押さえ込む。おかげで包皮が剥けて真っ赤に充血した肉豆は、終わることのない振動淫獄に晒され続けていた。
最も感じる部位を信じられないほどの微振動で刺激され続け、堕ちた剣士の心が、ゆっくりとより深い悦楽に沈んでいく。
「あぉぉっっ！　らめぇ、……お豆が潰れるっっ！　このままじゃ、わらし……おかしくなるっ！　壊れちゃうぅぅっっ！」
大事に口の中に咥えていた男根を吐き出してまで、懇願するカグヤ。現場となっている

股間では、ピュルッピュルッと断続的に小規模の潮吹きが起こっており、抱えられた足は指の先までビククッと痙攣をしている。かつて強い意志の光を湛えていた大きな瞳は、焦点が定まらないまま半分白目を剥いている。鼻や口から透明な液体を垂れ流し、唇からは「おぉっっ、おごぉぉっっ！」と獣のような声が轟いていた。

「うふふ、そんなこと言って……なぁにカグヤちゃん。そのお尻に突っ込んでるものは？」

淫核に集中するあまり、前屈みになりすぎた少女侍はお尻を丸出しにする格好になっている。ビリビリと大きく破られた袴から覗いているのは、小ぶりの桃尻にピッタリと張りついている蛸のような淫魔だった。

「これは……っ！　あぐぉぉぉっっっ！　おあぁぁっっ、かはっ、イ、イィィ……いぎぃぃぃっっっ！」

釈明する間もなく、前につんのめっている少女のお尻が浮いた。よく目を凝らせば、身体全体を吸盤のように使ってお尻に張りついた蛸妖魔の表面の皮が、外側に伸びてはまた元に戻るという行為を繰り返している。それはまさしく牡獣が牝に腰を打ち据える様に酷似していた。

「妖魔に搾乳されて、お尻の穴まで犯しぬかれて……カグヤちゃん。自分でも気づいてるわよね。あなたはとっくにおかしくなってるって」

ナギの核心を突いた言葉に、カグヤの表情が一瞬、暗くなった。まだどこかに残っている武士としての気持ちが、これまでどれだけ犯し続けられても認めなかった部分に触れる。

「わらひ……わらひは……ああぁっっ、イクッッ！　イっちゃうぅぅっっ！」
少女の身体が、顔が、お尻が飛び跳ねた。まるで前方に落馬する寸前の乗り手のように、下半身が持ち上がる。お尻に突き込まれる極太の触手勃起が、極限まで広がった肉壁をなお押し広げようと抉り込む。プ～ンと漂う悪臭が最上の香辛料に思えるくらい、少女の感覚は淫らに変化していた。
「誤魔化さなくていいのよ。もう気づいてしまったんだから」
ビュルッッと、お尻と陰唇から絶頂噴射が行われる。頬だけでなく耳まで悦楽の朱色に染めながらカグヤは、ただナギの言葉を聴いていた。
「あなたの心にはまだ侍としての強くて清い心が残っている。恥を被り、名誉を捨ててまで、このわたしを倒さなければならないという思いが、淫獄に堕ちるのを躊躇っている。勝てるわけがないとわかっていてもね……あなたのその心の強さがより強い妖魔を産んでくれたわ。けれどね……」
ナギは言葉を含み、そして手をスッと上げた。
ギュルルッッッ！
腰を押さえつけていた触手たちに力がこもるのと、これまでの快楽が玩具に思えるほどの電撃が脳髄に迸ったのはほぼ同時だった。
ただでさえ高く掲げられていた両足は、ちぎれんばかりに上へと引っ張り上げられる。背後から腰に回った太い触手は、巨大触手の方へと少女の下半身をズズンッと押しつけた。

この続きは製品版をご購入の上、
お楽しみください。

編集・発行
株式会社キルタイムコミュニケーション
〒104-0041　東京都中央区新富1-3-7ヨドコウビル
TEL03-3555-3431（販売）／FAX03-3551-1208

※本作品の全部あるいは一部を無断で複製・転載・配信・送信したり、ホームページ上に転載することを禁止します。本作品の内容を無断で改変、改さん等行うことも禁止します。また、有償・無償にかかわらず本作品を第三者に譲渡することはできません。
ⓒKILL TIME COMMUNICATION　Printed in Japan

http://ktcom.jp/